

留学先国名 : アメリカ

留学先学校名 : Austin Public High School

留学期間 : 平成 27 年 8 月 17 日 ~ 平成 28 年 7 月 15 日

私はアメリカ合衆国にあるミネソタ州のオースティンという町にて、一年間の留学生活を送りました。私の生まれ育った大阪とは 180 度違い高い建物は全くなく、広大な面積のトウモロコシ畑に囲まれた場所です。そこで体験した事や出会った感情、そして未来の留学生達の役に立てるような事を紹介できればと思います。

まず初めに、私の留学生活を語るには欠かせない「アメリカでの水泳生活」についてです。私は渡米後 2 日目から水泳部の練習に参加させてもらっていました。上のクラスのバーシティーに入れたのは嬉しかったのですが、言葉も全然わからなかったのでプレッシャーはありました。種目は 100 平泳ぎに加えて、日本ではやっていなかった 200 個人メドレーを専門に活動しました。練習の内容は日本のメニューのように繊細なものではなく、量とパワーという印象です。ある試合で撮られた写真が翌朝の新聞に載っていて驚いた反面、「載っているのを見たよ！」とみんなから声をかけてもらえて、すごく嬉しかったです。

高校の水泳シーズンは冬前で終わってしまうのですが、最終的には州大会の選考会に出ることができ、達成感と共に終えることができました。

その後、冬から春にかけてはスポーツジム YMCA のチームに所属を移して練習を続けました。語学留学なのにどうしてこんなにも水泳にこだわったのかと聞かれることがあります。ですが見知らぬ地で見知らぬ人の中で生活をするということは、いくら自分で望んで行ったとしてもやはり沢山のストレスや寂しさに襲われます。そこでその対策として効果的だと思ったのが、「自分の好きなことを、日本にいた時よりも全力でする」ということです。私の場合は水泳でしたが、アートであったり音楽であったり、とにかく自分の好きなことをやってみると人との出会いにも繋がるので一石二鳥だと思います。

YMCA でのシーズンも終わり、最後に私がどうしてもやりたかったことがありました。それはライフガードのライセンスを取るということです。講習期間中は学校の課題との両立が大変でした。そしてレスキューの訓練よりも、筆記試験の勉強に沢山の時間を取られました。でも無事に合格することができたので、挑戦してみてもよかったと思いました。

学校行事

ホームカミングウィークが 9 月の終わりから 10 月にかけての週にありました。その 1 週間は毎日ドレスコードが決められていて、パジャマデイには先生までパジャマを着て授業をしていて衝撃を受けました。メインイ

ベントのフットボールゲームでオースティンハイは負けてしまったのですが、その場の雰囲気がいまにもアメリカンで、自分がアメリカ映画のワンシーンに紛れ込んだかのような感覚になりました。最終日のダンスパーティーも、日本の高校にはないので楽しかったです。

イーストコースト旅行

帰国の約一ヶ月前、同じ留学団体の留学生約 40 名と二週間のバス旅行に出発しました。世界中から集まった同年代の生徒たちと同じ感動を共有できたことは、私の財産です。途中でノースキャロライナやテネシーで宿泊しながら、ニューヨーク、ワシントン D.C.、フロリダ、シカゴを回りました。その中で私が特に印象に残っている場所を紹介したいと思います。

初めに訪れた大都市はニューヨークでした。ブロードウェイではスクールオブロックというミュージカルを観ました。このミュージカルは小学生の子供達がキャストの大半を占めていて、大人顔負けの演技や歌唱力で私たち観客は圧倒されっぱなしでした。

ニューヨーク 2 日目は夕方まで自由行動だったので、地下鉄に乗って有名な本屋さんに行ったりスニーカー屋さんに行ったり、とにかく街を歩き回りました。ジョンレノンが暗殺された場所には、今でもセキュリティの警官がいて写真は厳禁、そこを通る時はなぜか凄く緊張しました。セントラルパークは予想以上に大きくて、途中でギブアップしましたが時間があれば中まで入りたかったです。他にもタイムズスクエア、自由の女神、9.11 記念碑を訪れた事が印象に残っています。ニューヨークは私の住んでいたミネソタとは全くと言っていいほど違った場所で、すっかり田舎に慣れていた私は久しぶりに街に人が溢れかえっているのを見て驚きました。

この旅行の中で私が 1 番気に入った州はフロリダです。フロリダはディズニーワールドがある州で、海に面しているので沢山の綺麗なビーチがあります。私たちはディズニーワールドではなくユニバーサルスタジオに行きました。パークが何種類かに別れていて、電車が走っているほど敷地が広いので、人の多さも気になりませんでした。ウィザーディングワールドオブハリーポッターがあるパークにも行きました。その時はもう真っ暗だったので、余計に雰囲気が出ていて感動しました。ハリーポッターに興味のない私でさえワクワクしてしまいました。ジェットコースターから見えた夜景がすごく綺麗で、何周でも乗っていたかったです。

フロリダでの残りの数日は海で過ごす事が多かったのですが、ピンクでもなく紫でもなくオレンジでもない、なんとも言えない綺麗な色の夕焼けが印象的でした。フロリダではワニの一種アリゲーターが有名で、みんなレストランに行って注文しました。味は美味しかったのですが限りなく鳥肉に近くて、アリゲーターだと分かっていなければ絶対に気づきません。

「フロリダは、場所にもよるが治安が悪い」と聞いていたので、どんな所なんだろうと思っていましたが普通に旅行に行く分にはとても素敵な場所だと思います。

最終日のお別れの時は、今までにないほど寂しかったです。世界中に沢山の親友ができ、私がアメリカから帰国した三日後に日本に遊びに来てくれた子もいます。まさかこんなに早い再会が実現するとは思っていませんでしたが、その行動力を私も見習って、この関係を一生続けていきたいです。

語学習得について

留学に行く前の私の中にあったイメージは...英語を使いこなせるようになるには、それなりの慣れも練習も必要、でもリスニングや簡単なコミュニケーションは出来るだろう。というものでした。でもアメリカに着いてホストファミリーと会った瞬間、頭の中が真っ白になったのが本音です。そして空港からホストハウスまでの2時間、車内は沈黙。「ああ、もうダメだ」と心の底から思いました。そんな所から始まった、第二言語習得の挑戦ですが 帰国直前に自信が付くまでの間、私は壁にぶち当たり続けました。

まずは理想と現実のギャップです。英語なんて渡米すれば嫌でも話せるようになっておりました。でも現実とは違います。私の場合、1番障害になったのは 間違えたら恥ずかしい、こんな事言って失礼にならないかな、相手にどう思われているかな、という日本人過特有の思考回路です。話さなければ伸びないのに「huh??」と言われるのを恐れるあまり、どんどん無口になっていきました。そんな状況から抜け出してわかった事があります。

『初めから頑張るって気の利いた事を言おうとしない』

そこに気を使いすぎて結局大切な事は何も言えなくなってしまいます。そうすると ああ自分の英語力は最悪だ。と落ち込んでしまいます。実際に英語漬けの毎日を過ごして、英語力を上げるには練習の質よりも量だと感じました。

『とにかくネイティブスピーカーが使っているフレーズや話すときの雰囲気を実似』

モノマネの域で OK です。そして話の内容を盗むのも一つの手です。(すぐく応用が利くので)

『イジられたらイジり返す』

相手に話しかけやすいと思われたら勝ちです。日本人ウケ抜群な「気が効いて誠実なイメージの"良い人"」になろうとするより、「話しかけやすく気さくなイメージの"良い奴"」になったほうがアメリカでの留学生としての生存確率は格段に上がります。

英語がだいたい話せるようになった頃、新たな問題が出てきます。これまでは外国語でしかなかった英語が 今では自分のものになっている。という状況になった時、自分の言葉で人を傷つける事ができてしまいます。つまり自分が発する言葉に責任がつくようになります。日本に旅行に来た外国人が「ヤバイ チョーキモイ」なんて言っていたら少し面白くて微笑ましい、そしてなんだか可愛いとまで思ってしまう。でも、普通に日本語を話せる人に同じ事を言われたら、(その状況によりますが)傷つきます。なので英語が話せるようになったら、次は相手の気持ちやその場の空気を考える事も必要になります。これは難しい事ではありますが、「ついに英語を自分のものに出来たんだなあ」とプラスに考えることが大切だと思います。生まれた時から2つの言語の中で育ったバイリンガルでない限り、語学勉強に終わりはありません。なので、コツコツ自分のペースで、楽しみながら勉強を続けていく事が一番です。

留学を通して私が感じたこと

留学生活前半の自分は何に対しても消極的で、周りの目が気になる事でいろんなものがコンプレックスになり自分を表現できないでいました。「私は日本人に生まれたから、そこからもうダメだったんだ。」というように、自分のアイデンティティー全てに誇りを持たない時期が長く続きました。すごく時間がかかってしまったけれど、今は人よりも色々なものを見てきたことが自信になっています。たとえ言葉で表現するには複雑すぎるマイナスな感情であっても、「それがどんなものだから知らない人間よりは良い」とプラスに考えられるようにもなりました。そして16.17歳のこの時期に自分や母国を客観的にみられる機会があったことにはどれだけ感謝しても足りません。私はこの一年で後悔しない生き方がなにか見えてきた気がします。今まで「留学」は語学習得が醍醐味だと思っていたし、正直「文化交流」というワードでさえ漠然としたものでしかありませんでした。でも行って見て、そして終えてみて初めて、自分が得た価値のあるものは語学ではなく「家族からの無償の愛に気づけたこと」「赤の他人でもたった数ヶ月の間に家族になれると知ったこと」「人との出会い“縁”ほど不思議で素敵なものはそうそうないということ」「人生、常識、価値観、信じているものは人それぞれであってどれも間違っていないと感ぜられるようになったこと」挙げだすとキリがなくても、それだけ沢山のものを吸収できたということが、自分が自分に生まれてきてよかったと思える理由になりました。

留学とは行って帰って来れば自動的に英語も話せて人脈も広がっているマジックボックスみたいなものだと思っていました。でも入ったその箱の暗闇の中であった数え切れない出来事や、箱から出てくるまでに出会った感情そのものが「留学」なんだと今なら言うことができます。

人生で一番の一年間を紙の上にとめるのは凄く難しく、これはほんの一部でしかありませんが、本当に感謝感謝の一年でした。これからも留学を通して出会った人たちを大切に、そしていつか恩返しができるように生きていきたいです。

*It's not a year in a life, it's a life in a year.

(留学とは)人生の中の一年ではなく、人生が詰まった一年である。